

デイスアビリティ ——社会を照らす「鏡」——

澤田康幸

一六年前、留学のためアメリカに到着した直後のことですが、昼食をとるのもおぼつかない英語能力しかなかったため、リスクを回避してマクドナルドに行きました。列に並んで自分の番になりましたが、英語に自信がなかったため、念のため二回「ビッグマックコンボ」「ビッグマックコンボ」と繰り返したら、見事に二つのビッグマックコンボが運ばれてきました。しかし、間違いを指摘する英語力は持っていませんでした……。

最近、同僚の松井彰彦教授率いる学術創成研究プロジェクト「総合社会科学としての社会・経済における障害の研究（READ）」のメンバーに加えていただきました。そして、障害学を学んでいくうちに、一六年前の出来事は、英語社会でのコミュニケーション法が無いことによる「デイスアビリティ」の問題だったのだと思うようになりました。そもそもハンバーガーを注文するくらいの日本語能力は持っていたわけですから、逆に日本語を理解してくれない社会環境がデイスアビリティを生んでいたといえるわけです。とはいえ、教育を通じて英語社会でのデイスアビリティはほぼ克服されるにいたりました。

現在、東京大学先端科学技術センター 福島智教授のもとで博士号を目指している、ラミチャネ・カマルさんと、ネパールの実態調査に基づいた障害者の教育収益率^{*}の推計を行っています。教育収益率は、賃金の対数値を左辺・教育年数を右辺の変数とした、ミンサー方程式と呼ばれる労働経済学では最も重要な回帰モデルによって推計されます。計量経済学上の内生性の

問題を回避するため、我々は機能的障害（インペアメント）に関連する情報を教育年数の操作変数に使っています。

この研究でわかったことですが、ネパールでは特に聴覚障害者の教育年数が低いものの、障害者の教育収益率は約二〇%以上の高さにもなります。ネパールでは、我々が当然と思っているような学習環境が、特に聴覚障害者には十分には保障されておらず、深刻な制度的障壁が存在するのです。まさにこれはデイスアビリティといえます。そして、そのようなデイスアビリティを克服して教育を受けることには大きな便益が存在するのです。アジ研の森壮也さん・山形辰史さん達のフリーピンの研究でも高い教育収益率が見出されています。

我々は、しばしば障害を福祉やチャリティーとの関連のみで考えがちですが、デイスアビリティというのは、我々の社会が生み出したものであり、デイスアビリティを見ることで逆に我々の社会の障壁や問題が浮き彫りにされるといえるでしょう。つまりのところ、デイスアビリティは、我々の社会そのものを照らす「鏡」なのではないでしょうか。こうしたデイスアビリティはネパールだけの問題ではなく、日本においても程度の差はあれ存在するはず。READプロジェクトでは、日本における障害者の実態調査を通じて「ピカピカと磨かれた鏡」を作り、社会の課題を浮き彫りにする作業をすすめています。

（さわだ やすゆき／東京大学大学院経済学研究科准教授）

^{*}教育年数を追加的に一年延ばした場合に、何%賃金が上昇するかを示す。ミンサー方程式を用いてこの教育収益率を正しく推計することが、労働経済学の最も重要な課題の一つとなっている。